

可能性 未来はあるか？～

政界展望



ジャーナリスト
鈴木哲夫

島根1区自民党は中央から岸田首相など幹部クラスが次々に選挙区入りした

3補選全敗の舞台裏と 解散・総選挙の ～岸田政権に



岸田自民、 3補選全敗の舞台裏

当然の結果であり、各党やマスコミ各社の情勢調査通りの結果だった。

4月28日に行われた衆議院の3つの補欠選挙は立憲民主党がすべて勝利。

そもそも、自民党は2つで独自候補を擁立することができずハナから実質2敗確定。身内からも「情けない。でもそれだけの党は深刻だということ」(自民党元選対幹部議員)なのだ。

岸田文雄政権に対しては、政治資金パーティーの裏金事件の中途半端な処分について世論はまったく納得せず自民党へは大逆風。今回マスコミ各社もこうした裏金事件への審判という側面をクローズアップした。しかし、ここ2年にわたって、旧統一教会問題、LGBT法、身内への甘い危機管理、少子化対策の身身、防衛増税、二転三転の税還元発言などなど。振り返ってみれば、一時外交で挽回した以外は岸田政権の支持

率は過去最低ラインを推移してきた。単なる裏金問題だけでなく、岸田政権や自民党は、政権運営や政権基盤、そして与党としてのありかたそのものへの審判だったという危機感を持たなければならぬのではないのか。その自覚がなければ今後の命運に決定的な流れができるかもしれない。

今回の補選、水面下ではどんな展開だったか。

まず、唯一自民党が候補を擁立した島根1区。ここは、細田博之前衆議院議長の死去に伴う補選だった。

自民党は、元中国財務局長の錦織功政氏、これに対して、立憲民主党は元衆議院議員の亀井亜紀子氏を擁立。共産党は候補を取り下げ亀井氏に一本化。結果は亀井氏が錦織氏に圧勝した。

終盤戦に入り、連日、中央から岸田首相、かたや泉健太立憲代表など幹部クラスが次々に選挙区入りした。

旧知の自民党のベテラン市議は、選挙区の様子をこう話していた。

「ずっと厳しい。特に私が回っている中で準支援者とも言える商店街

の反応は相当きつい。理由は裏金事件の処分がすべて。インボイスとか苦労しているから余計に反感を持たれている。『今回は悪いが』と商店主から言われる。街頭をやっても動員以外の人は足を止めない。後半戦の選挙戦術はもうはつきりしている。最後は、支持を広げることよりもいままある組織票をいかに固めるか、ある意味内向きの選挙だがそこに全力を挙げるしかない」

また細田氏への批判もあると言った。

「今回細田さんの用い合戦だから盛り上がるはずだが、地域で企業団体などを回っても言われるのは細田さんが遺したものへの批判だった。旧統一教会との関係も記者会見で十分な説明ができなかったし、例の裏金問題で言えば、じつは細田さんも清和会の会長だった。裏金の仕組みがずっと続いてたわけだから細田さんも責任ある当事者。長い付き合いの商店主も『細田さんは何もしやべらなかつたね』と皮肉を言われる。





東京15区は立憲新人で元東京都江東区議の酒井菜摘氏が8人を下した

弔い合戦などという以前の問題だった」

また、自民党の島根県議会議員の1人は別の空気を話した。

「時代が終わったという空気になっっている。島根と言えば、竹下(登)さんに始まり、青木(幹雄)さん、(竹下)亘さん、そして細田さん。でも、ついにみんないなくなった。次の島

根自民が見えない中で、組織や自民党支援者も消失感というかやり終えた感がある。活力がない」

このほか、世代交代がうまく行っていないことや、地元の地方選挙で自民党が分裂するなどして組織内で尾を引いていることもあったという。

また、岸田首相が現地入りする日

程が明らかになると、その直後に島根県連には古くからの支援者から「なぜ来るのか。水面下に潜って必死に組織固めている時に、表で逆風の張本人が演説するなど逆効果だといった反対の電話が何本も入った」(前出市議)という。

選対幹部議員によると告示前、自民党は1週間ごとに島根の情勢調査を続けてきたという。そこでは少しずつ差を詰めてきたが2桁離され、告示後には再びその差が開き、調査を止めたという。つまり「実質敗北宣言だ」(同議員)だ。

もちろん亀井氏が無党派や批判票を集め圧勝したが、一方で、自民党自身の組織としてのまとまりやガバナンスが崩れてもいた。これは、今後に大きな傷を残した。

「地方組織の崩壊といってもいい。次の解散総選挙という本番で、もう一回(地方組織が)まとまれるのか。このまま岸田さんや茂木(敏充幹事長)さんたちの体制で旗を振ったところで戦えるのかということも含めて先が見通せない」(同市議)

一方で野党は一本化にこぎ着けた。



当初共産党も名乗りを上げていたが、3月18日新人の擁立を取り下げると発表。理由を「この補選は裏金問題や旧統一教会との深い関わりなどその象徴的な政治家だった細田氏に代わる議員を選ぶ選挙。野党が協力して候補の一本化を図り、自民党と1対1の対決構図に持ち込むことが必要」(共産党島根県委員会)とした。

立憲の選対幹部の1人が言う。

「いま政党の中で最もしたたかに現実対応するのはもしかすると共産党かもしれない。プラスになると判断すれば一夜にして平気で候補を取り下げる。もちろんバスターでどこかほかで条件を勝ち取っているだろうがそのしたたかさは自民党並み。原理主義的なイメージの政党だが、こと選挙になればリアリストだ。東京15区でも同じ判断で候補を取り下げ野党一本化した。裏で立憲幹部などと詰めているのは小池晃書記局長だろう。小池氏は野党共闘で過去にも水面下で動いてきていた」



プラスになると判断すれば一夜にして平気で候補を取り下げる

さらに、目立っていないが、今回日本維新の会が候補擁立を断念したのも、結果的には野党分断を避けることに繋がった。維新幹部は「擁立しようと思ったが時間もなく候補も絞れなかった」としているが、前出立憲幹部は「立てなかった維新には感謝している。来る総選挙への野党候補のある意味住み分けの話し合いのきっかけにも

東京15区の混乱と問題点

東京15区は公職選挙法違反事件で柿沢未途前法務副大臣が議員辞職したことに伴うもので、自民党は擁立断念。立憲新人で元東京都江東区議の酒井菜摘氏が、無所属や諸派の新

人、それに小池百合子都知事が支援した作家の乙武洋匡氏ら8人を下した。舞台裏はこうだった。

自民党はどんな選挙戦にするのか当初から難しい対応を迫られたのだが、「もはやこれしかない。つまりうちが候補を出す、選挙戦ではうちが表に一切出ずに裏に回る作戦」(自民党東京都連の衆議院議員)をとうとうとした。

ずっと岸田政権の政権運営や自民党に対する世論の目が厳しい中で、自民党東京都連と連立のパートナーの公明党はこのところの東京の地方選挙でしんできた策があった。それは、自公に加えて連携し表に出る3番目のパートナーとして小池百合子東京都知事を取り込むことだった。

つまり、「自公&小池」の3派連合で戦い、街頭演説など表の選挙戦は人気の小池知事を前面に出した。昨年来の東京都内の首長選挙で自民党は連敗してきたが、その後この3派連合で戦った八王子市長選挙や江東区の出直し区長選挙などは勝利している。

今回の補選も不戦敗を避けたい自民党は当初それを狙った。

「まずうち(自民党)が候補を探すとときに、小池知事が乗ってこられるだろうという候補を探した」(前出衆議院議員)

今回、自民党は小池氏も縁がある財団関係者に絞って擁立を進めた。「しかし、この人物が断つてきたために一気に難航してしまった」(同)

これによって自民党の目論見が完全に壊れた。

そんな中で、国政への足がかりを作りたい都民ファーストの会(国政の呼称はファーストの会)が作家の乙武氏を擁立し、水面下で逆に自民党への選挙協力を求めた。ファーストは前回の参院選で小池知事の側近の荒木千陽都議を立てて敗れている。

ところが、乙武氏が2016年の参院選に自民党から出馬の予定だったが不倫騒動で辞退した経緯などもあり自民党三役は当初から「乙武氏





補選の争点は自民党の裏金問題なのに演説は
バリアフリーなど障害者政策だった

の推薦はない」と明言。また公明党も、最大の支持団体の創価学会などが乙武氏の過去を問題視して共闘に難色を示し3派は完全に乱れた。それでも、「うち（都民ファースト）としては、維新のように地域政党として国政にも足がかりを作りたい。小池知事の人気で自公と連携しなくても乙武氏で勝てる」（都民ファースト都議）と踏んでいた。

ところが、そこへきて選挙直前になり、小池知事に学歴詐称疑惑が再び突きつけられた。

月刊誌「文芸春秋」で、小池知事

の側近、元環境省官僚で都民ファーストの会事務総長も務めた弁護士の小島敏郎氏が、4年前に取り上げられた小池知事のカイロ大学主席卒業という学歴の詐称疑惑を証言。「疑惑が騒がれた当時、自分が大学に声明文を出してもらえればいいと提案し、その後小池知事の知り合いの元ジャーナリストが声明文を書いた」というものだ。良心の呵責から今回明らかにしたという。

「声明は大学当局が意思をもって出された」と全面否定。そして、告示

日も街頭で小池知事は乙武氏と並んだ。野次も飛んだが完全無視、まったく動じなかった。

小池知事とは長く親交のある政界関係者が言う。

「不利になったり追い込まれると身を隠したり逃げたりする政治家が多いが、小池さんは違う。むしろ、意地でも前へ出て反論し形

勢逆転を狙う。ただそうやって振る舞っているというときは、逆に言えば、必死に対応しているという証明でもある」

そもそも、小池知事が自公と連携したりしながらこの先描いているシナリオはどういうものだったのか。

一部では盛んに今回の東京15区の補選に出馬するとか、国政復帰で首相を狙うとか言われてきていたが私は懐疑的で、あくまでも知事3選ではないかと思う。

小池知事と長く親交のある与党ベテラン議員が言う。

「もし小池さんが国政に復帰しても自民党のどの勢力が彼女を本気で首相に担ぐというのか。多数派なんかできるはずがない。元々小池さんは国政に見切りをつけリベンジで知事になったのに、また国会に、しかも首相になれなきゃ一議員なんてあり得ない」

だとすると小池シナリオは、やはり「7月7日に行われる都知事選での3選」（同ベテラン）。これまでの流れを見ると合点が行く。3選のためには、自民党に対立候補を出してもらっては困る。

「東京の選挙で自民に救いの手を差しのべ自公と連携してきたのは、知事選で候補を出さないとか推薦とかの条件がバリエーションになっている。自民都連会長の萩生田光一氏と話をきてきている」（前出与党ベテラン）

また、意外な自民党との関係もあるという。

じつは岸田首相とも話ができていたというのだ。

「知事選まで1年を切った昨年度以降、小池知事は予算要望などを理由に何度か官邸に行ったが、その場で岸田首相が知事選で譲る代わりに都内の選挙などで協力して欲しいと話をしたようだ。2人はじつは1993年衆院選の当選同期。意外に話ができる仲で一緒に飲むこともたくさんあった。岸田政権が誕生したとき、小池知事は総裁選で岸田氏を応援しているんだと周辺に話していた」（旧岸田派ベテラン）

確かに小池知事は、今回乙武氏の応援演説の際に自民党の裏金事件など政治とカネについてなんとほとんど





3番目のパートナーとして小池百合子東京都知事を取り込むことだった

ど触れなかった。「今度の補選の争点は自民党の裏金問題しかない。なのに演説はバリアフリーなど障害者政策だった。今回、自民と推薦など連携は破綻したが、知事選へ向けての自民との連携を考え、岸田批判、自民批判は避けているとしか思えない」（立憲選対幹部）

結局乙武氏は敗れた。今後、知事選へ向けて、小池人気や学歴問題がどう影響するか、国政とは別の問題も残した。

そして自民党そのものも、今回自民党支持票や保守票がバラバラに他の候補に分かれて行ってしまう結果となった。次期総選挙において15区で自民党地方組織はまとまって機能

するのか、大きな不安を残した。

それでも

岸田首相は解散する？

しかし、総じて言えば今回の補選、何勝何敗だの言う前に憂うべき重要な視点がある。それは、いくら補選といつても衆院選は政権選択選挙ということ。そこに、政権党の自民党が候補を出さなかったということ自体政権を担う資格がないと公言したことになる。

「国民政党として選択を狭めてしまったことは重い責任だ。勝ち負けは別にして信を問うべきだった」補選の告示後、自民党の森山裕総務会長は講演でそう語った。その通りだ。

自民党の矜持はどこへ行ったのか。

岸田首相に近いベテラン議員は「全敗でも関係ない。解散の可能性はある」として続けた。

「いま岸田首相には二択しかない。1つは1期3年で辞める。賃上げや防衛、少子化など道筋はつけた。内閣支持率などを考えればここで身を

引くという決断。その場合は解散せずに9月までやって総裁選には不出馬」

そして、何ともう1つが、解散・総選挙を打つというものだ。

「道半ば、もう1期やると決断すれば、おそらく9月の総裁選では、岸田の顔では今後戦えないと負ける可能性が高いので、その前に解散総選挙をやる。自公で過半数とれば政権は国民に信任されたことになるわけので9月の総裁選でおろせなくなる」（同ベテラン）

解散の時期はというと、少しでもいまの支持率を上げてから、たとえば、日米首脳会談の成果、GWには再び外交を展開、日朝会談も画策、国内では賃上げや夏前の税の還付、さらに裏金問題で踏み込んだ法改正など、とにかく何でもありで支持率を上げて解散。しかも、野党が内閣不信任案を出すであろうから解散の大義もできるという。これらを考えると6月会期末。

全敗の責任などどこ吹く風…。国会終盤は政局だ。（了）

